

日本英語教育史学会 会報

321

2024 年 6 月 21 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第40回全国大会報告

2024 (令和 6) 年 5 月 18 日 (土)・19 日 (日), 第 40 回全国大会が県立広島大学での対面と Zoom を用いたハイフレックスの形態により開催されました。初日には江利川春雄氏 (和歌山大学名誉教授・日本英語教育史学会名誉会長) による「英語教育史研究の達成と未成」と題する講演、及び 5 本の研究発表が行われました。また二日目は 7 本の研究発表及び対面限定の記念プログラム「『日本英学者人名事典』刊行の経緯・意義・課題」が行われ、2 日間で述べ 108 名の参加がありました。ご参加いただいた皆様、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。以下に出席者の感想を掲載しますのでご参照ください。



江利川 春雄 氏



熊谷 允岐 氏



小林 大介 氏



下 絵津子 氏

<講演の感想>

- ◆江利川先生のご講演を久しぶりにお聞きする機会に恵まれ、改めて英語教育史、歴史研究の魅力と今後の課題を理解することができました。先生のさらなる研究のご進展を楽しみにしております。ありがとうございました。(匿名希望)
- ◆とても刺激的でした。自分自身何ができるのかを考えさせられました。(SS)
- ◆江利川先生、ありがとうございます。先生のお話に引き込まれてあっという間の90分でした。先生のこれまでのご功績、それを引き継ぐ諸先生方、この学会のさらなる発展を感じる40周年でした。50周年の時に、未成が達成となり、英語教育がさらに発展するように、私も微力ですが児童生徒たちのためにがんばろうと思いました。(堀由紀)

- ◆英語教育史研究にはまだまだ多くの課題が残されていることを痛感するとともに、ほんの少しでも自分が貢献できればと思いました。(広川由子)
- ◆江利川先生のご著書8冊をいつも手の届く処へ置いて愛読している(書棚にきちんと収納すると取り出す時間が惜しい)者ですが、今回久しぶりに広島で対面で「江利川節」を拝聴することが出来大変勉強になりました。先生の「人生を語る」お姿に接した後に続く「若い衆」は感動したと確信いたします。それと同時に、「英語教育学」が「学」として文部省(当時)に認可され、大学院に研究科が設置されるまでの「いばらの道」を歩んでこられた諸先生方の顔か脳裏をよぎりました。江利川先生、これからも健康に留意され後進の指導にご尽力くださいませう。(もみじまんじゅう)
- ◆本当に参考になりました。(Ishihama Hiroyuki)
- ◆第40回という記念すべき大会において、江利川先生より各分野における英語教育史研究の歩みをお話し頂き、あらためて英語教育史を研究する重要性を認識することができました。次の50周年に向けての『日本英語教育史事典』の制作を今から心待ちにしております。(匿名希望)
- ◆英語教育史事典の企画は学会でぜひ達成したいものです。(K-shu)

研究発表タイトル・発表者一覧

- 発表1: 江戸および明治期における英単語集一覧表の作成:『日本英学資料解題』の再活用を目指して
熊谷 允岐(茨城大学)
- 発表2: 杉村楚人冠の「如何にして英語を学ぶべきかを如何にして学ぶべきか」にみるコミュニケーションについての一考察
小林 大介(静岡市立高等学校)
- 発表3: 複数言語学習の視点から分析する嘉納治五郎の言語教育観
下 絵津子(近畿大学)
- 発表4: ローマ字指導の歴史
堀 由紀(和洋女子大学大学院 [院生])
- 発表5: 石橋幸太郎の英語教育目的論:その形成過程の検討
柁木 貴之(大阪大学)
- 発表6: 占領期沖縄における英語教育政策:初等学校への英語科の導入と廃止
広川 由子(千葉県立保健医療大学)
- 発表7: 大学英語教育に対する日経連意見書(1955)に関する一考察 その2
水島 孝司(南九州大学)
- 発表8: 実用英語技能検定の広がり:英検機関紙(1963-2001)を基に
孫工 季也(金沢学院大学)
- 発表9: 戦前の中学校英語教科書における教科横断的要素について(2)
二五 義博(山口学芸大学)
- 発表10: 高校英語教科書におけるジェンダー規範:女性表象の変化とLGBTQ+不在への一考察
末澤 奈付子(京都橘大学)
- 発表11: 広島市立中学校英語部会第1研究班記録(昭和32年度)について一昭和30年代中学校英語教育実践史一
隈 慶秀(福岡県立明善高等学校)
- 発表12: 広島高等師範学校文科第二部・広島第二臨時卒業生と東京高等師範学校文科第三部・東京第一臨時教員養成所英語科卒業生の卒業動向の比較に関する一考察
鈴木 聡(鳥羽商船高等専門学校)



堀 由紀 氏



榎木 貴之 氏



広川 由子 氏



水島 孝司 氏

<発表1の感想>

- ◆私自身は辞書の方も研究しているので、とても参考になりました。(SS)
- ◆熊谷先生、ありがとうございました。単語を覚えることに苦勞している児童生徒にとってとても重要なお研究だけではなく、他教科にも活用できる可能性があるということで、この後のご研究にも大変興味があります。(堀由紀)
- ◆『蘭学英学資料撰』しか精読したことがないので『解題』のお話はとても勉強になりました。『解題』をベースにして単語集のご研究が一層深化することを期待しています。(もみじまんじゅう)
- ◆全く知らないことばかりでとても興味深く発表を伺わせて頂きました。見出しだけでも、イロハ別のみならず、天文分野別、官版分野別、元素分野別と様々であったことを初めて知り、英単語集一覧表のリンクよりぜひ実物を見てみたいと思っております。(匿名希望)

<発表2の感想>

- ◆資料が少なかったためか、やや話の膨らみがない気がしました。次回を期待しています。(SS)
- ◆小林先生、ありがとうございました。教室などでの実践についてのご研究について、今後明らかになりましたら、ぜひ伺いたいです。語学習得の回り道と近道、二つの学習法の取り入れ方にも興味があります。(堀由紀)
- ◆杉村により回り道と近道が紹介されませんが、私にとっては今でもそれら二つの道は同じ道です。ということは、私には言語適性が備わっていないということですかね。杉村先生、改めて自覚させていただきありがとうございます。(笑 or 涙?) (もみじまんじゅう)

<発表3の感想>

- ◆嘉納治五郎のことは知っているようで知らなかったもので、面白かったです。ありがとうございました。(SS)
- ◆下先生、ありがとうございました。嘉納治五郎のご発表を楽しみにしておりました。ご発表の中で、特に嘉納治五郎の母語を含めた複数の言語資源の活用について興味がありました。(堀由紀)
- ◆私は「広島ラフカディオ・ハーンの会」(月1回例会)の末端会員でハーンの勉強をしています。ハーンの尊敬する嘉納治五郎は五高校長としてハーンを温かく遇しました。両者とも広い心の持ち主、共感するところがあったことでしょう。(もみじまんじゅう)



孫工 季也 氏



二五 義博 氏



末澤 奈付子 氏



隈 慶秀 氏

<発表 4 の感想>

- ◆日本におけるローマ字の変遷を概観することができ、また今の日常の中に混在するローマ字への気づきを与えていただき大変興味深かったです。(匿名希望)
- ◆ローマ字は私も辞書を調査しているなかでいろいろと疑問に感じたことがあり、いずれ纏めてみたいと思っていました。参考になりました。ありがとうございました。(SS)
- ◆ご発表を拝聴して、小学生時代が鮮やかに蘇りました。トンボ、ホタル、フナ、メダカ、ツバメ、キジたちと共生した田舎での生活。生まれて初めてアルファベットを習った時、地球上にはこんな文字もあるのかを知ってビックリ。ローマ字教育の歩みをクロノジカルに 教えていただき大変勉強になりました。充実の院生生活でありますよう。(もみじまんじゅう)
- ◆現在も様々なローマ字の表記が使われている理由としての歴史的背景をわかりやすくまとめて頂き、自分の理解を深めることができました。今後、どのように国語科と英語科が連携することができるのか、更なる調査の報告を楽しみにしています。(匿名希望)

<発表 5 の感想>

- ◆岡倉、福原の目的論を引き継いだ石橋という視点が新鮮で興味深く聞かせていただきました。学びの多いご発表、ありがとうございました。(匿名希望)
- ◆石橋には『書齋随想』と言うエッセイ集も出ています。ご参考になれば幸いです。(SS)
- ◆征木先生、ありがとうございました。英語教育目的論は常に考えていることで、大変興味深くご発表を拝聴させていただきました。国文法の難しさ、英語との違いを改めて感じ、連携の重要性を感じました。今後、言語学習にとっての最適な具体的な連携内容についてご教示いただければと思っております。(堀由紀)
- ◆石橋の目的論のお話を伺って、大学院の授業で院生たちと英国やドイツの「学習指導要領」に記された目的論、目的と目標の違い等の論議を思い出しました。今はスマホのアプリで外国語を知らなくても互いにコミュニケーションが可能な時代、石橋が生きていたらどのような目的論を展開するだろうと空想してみました。(もみじまんじゅう)

<発表 6 の感想>

- ◆調査結果に対する解釈は慎重に行わなければならないことを再確認する機会を与えていただきました。(匿名希望)



鈴木 聡 氏

◆各群島から琉球政府になる過程等を調査すると研究の幅が増える気がします。なお、初等教育と言うのはあくまでも小学校のみです。実業学校は中等教育機関です。中等教育機関な範囲は中学、高等女学校、実業学校になります。ご参考になれば幸いです。(SS)

◆広川先生、ありがとうございました。貴重な資料の発掘とその研究がいかに今後の英語教育に貢献し、重要であるか再認識しました。ハークネスの「沖縄の児童たちの環境と学力について」の発言、文指第187号の「小学校の英語指導について1～4年は英語の時間を特設しなくても他教科と組み合わせることによって指導できる」という点が特に興味深かったです。(堀由紀)

<発表7の感想>

◆先行研究に対する姿勢、立証と提案の中に歴史研究の真髄を見たような思いです。ありがとうございました。(匿名希望)

◆これまで、言われていた定説を豊富な資料で検討し、覆えされたのはすごく勉強になりました。ありがとうございました。(SS)

◆水島先生、ありがとうございました。過去の発表内容や発言などを読み解き、明らかにすることで、現在、未来につながるご研究で大変興味深いご発表でした。(堀由紀)

◆丁寧な論証でよく理解できました。(K-shu)

<発表8の感想>

◆入試での優遇という論理の中には他の外部検定試験との比較(受けやすさや方式など)も入るように思いました。ご研究のさらなる進展を楽しみにしております。(匿名希望)

◆英検協会はその成り立ちから旺文社がかんでいました。事実、旺文社の社長の赤尾好夫が会長をしていたはずです。また、英検の受験者が増えた時期と高校進学や大学進学が増えた時期の調査も必要だと思います。今でこそ、高校進学率は100%近いですが、昭和30年代だとそこまではなかった可能性があります。そういった側面も調査する必要があると思います。(SS)

◆孫工先生、ありがとうございました。児童英語教室に通う児童は小学校のうちになるべく早く英検を取りたいと希望しているご家庭(本人?)も少なくありません。年齢的には、取得しても高校受験、大学受験には直結しないため、英検受験の低年齢化も気になるところです。(堀由紀)

◆未開拓の分野でとても興味深かったです。(広川由子)

◆このような視点からの研究の捉え方があったのかと思いました。(Ishihama Hiroyuki)

◆英検受験者が年々増加している現在、今は低年齢化もより進んでいると想像できることからさらに2001年以降の動きについても今後調査をして頂けることを期待しています。(匿名希望)

◆英語教育史のなかでも忘れられていたことに気づきました。これからの研究の進展を願っています。(K-shu)

<発表9の感想>

◆当時の教科書がレベルが高かったのはやはり、旧制中学の生徒のレベルが高かったことによ

るものと思われました。基本旧制中学の進学率は8%程度です。今だこのレベルの旧制中学3年と同年齢の学年に使用するの難しいかもしれないと思いました。(SS)

◆CLILを引用して述べていましたが、時代背景が違っているので、最近はやりのCLILを使った説明を少々疑問に持ちました。(Ishihama Hiroyuki)

<発表10の感想>

◆非常に学びの多いご発表でした。今後、LGBTQ+の話題はこれまで以上に英語教科書でも取り上げられるように思いますが、取り上げられるとするならばどのような形で取り上げられるのが理想なのか疑問に思いました。(匿名希望)

◆この分野に関しては考えたことがなかったので新鮮でした。ありがとうございました。(SS)

<発表11の感想>

◆指導上の問題点は現代を含むどの時代の教室実践にも当てはまるものだと思います、大変興味深く聞かせていただきました。(匿名希望)

◆もう少し具体的な資料があればより深い内容になった気がします。ありがとうございました。(SS)

◆広島中英研第1研究班の活動記録は私自身が中学生だった頃の内容、100パーセント懐かしく思い出すことができました。隈先生が広島市の教育実践を取り上げてくださり、広島人の私は感謝・感激です。(もみじまんじゅう)

<発表12の感想>

◆内容もさることながら、定説への疑問から生じる問題意識やデータに基づいた丁寧な分析など、研究者としての姿勢に感銘を受けつつ、参考にさせていただきたいと思いました。(匿名希望)

◆大正末期、昭和初期の「茗溪」と「尚志」の卒業生の動向を詳しく教えて頂きありがとうございます。「尚志」の系統の私は様々なことが脳裏をよぎりました。私が学部生・大学院生だった頃、広島高師・文理大の先生だった方々がそっくり新製の学部・大学院で教官として教鞭をとっておられ、戦後の教育を受けつつ、同時に高師、文理大の教育も受けることが出来た果報者の一人です。(もみじまんじゅう)

記念プログラム『日本英学者人名事典』刊行の経緯・意義・課題



江利川 春雄 氏



竹中 龍範 氏



上野 勇治 氏



森 悟 氏



熊谷 允岐 氏

『日本英学者人名事典』(2024年、港の人、1,172ページ)は初代会長・故 出来成訓先生による編著、江利川・竹中両歴代会長の校閲を経て、1月に刊行されました。対面限定で開催された記念プログラムでは、校閲の二先生、出版を手掛けた港の人・上野勇治社長に登壇いただき、指定討論者として森・熊谷両先生を交え、出版をめぐる出来先生の思いや本事典の意義、これからの学会の使命などについて語り合いました。丸2時間があつという間に過ぎてしまうほど、熱のこもった発言に登壇者、そしてフロアから続き、学会40年に相応しい議論の場となりました。出来先生の大著を受け、次の10年で『日本英語教育史事典』の刊行を!という学会挙げてのプロジェクト構想も共有され、久しぶりに出来先生から励ましのお言葉を頂戴したような思いがします。登壇者5名の皆様、記念プログラムの趣旨を理解し、対面での議論に加わってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。(コーディネータ 馬本 勉)



<記念プログラムの感想>

◆それぞれの登壇者の方々のお立場や視点から語られるお話のひとつひとつが人間味のある大変興味深いもので楽しく聞かせていただきました。出来先生の御功績の偉大さと歴史研究の意義を再確認することができました。(匿名希望)

◆新たな話の側面が見えて面白かったです。ありがとうございました。(SS)

◆この度、日本英語教育史に深い学識をお持ちの江利川、竹中両先生がそれこそ命がけ(?)で「校閲」にあられた。刊行までの経緯を語られたが、まさしくそのお話は「苦心談」であった。この「苦心談」の精神は末永く生かされるものと思う。また、出版企画の段階から本事典の価値を早くから認識しておられた上野氏の鑑識眼にも敬意を表したい。私にも大学時代の同級生に出版社の社長がいる。彼は私の著書2冊を彼の会社から刊行してくれた。両書ともいかにも堅苦しく、売れない内容の本なのだが彼は評価してくれ出版を引き受けてくれた。出版に携わる人たちの中にこうした方々がおられることは研究者の一人としてこれほど嬉しいことはない。指定討論者のお二人は本事典を正確に読み取り、極めて適切な論評をされた。記念プログラムがこれほどアカデミックになったのは両先生のお陰と言える。(もみじまんじゅう)



一日目を終えての記念撮影

＜大会全般の感想＞

- ◆上野先生, 大会実行委員長として運営の中心を担っていただきありがとうございました。遠方から対面で参加して良かったと思える素晴らしい大会でした。(匿名希望)
- ◆とても、勉強になりました。また、来年と参加したいと思います。有難うございました。(SS)
- ◆ご準備から当日の運営まで、有難うございました。今後も楽しみにしております。(堀由紀)
- ◆運営に携わってくださった先生方、有難うございました。深く感謝申し上げます。(広川由子)
- ◆馬本、河村、上野先生、その他関係者の方々のご苦労のお陰で本大会が無事に終わった。私はパソコン、インターネットのない時代にいくつもの学会事務局を担当した。裏方の苦労は身に染みている。本当にありがとうございました。(もみじまんじゅう)
- ◆1987年に会員になり、はじめて ZOOM で参加しました。もっと早くから参加すればよかったかなあとと思っています。ただし、それぞれの研究は私には刺激となりました。(Ishihama Hiroyuki)
- ◆第40回という節目を記念する大会にふさわしい企画をご準備いただき、記念講演、研究発表、記念プログラムのいずれも記憶に残るものとなりました。有難うございました。特に、記念講演にて前会長の江利川先生からは大きな宿題をいただき、中堅層の方々を中心にぜひ『日本英語教育史事典』の完成を目指していただきたく願っております。私もこれまで英和辞典の編者や事典類の項目執筆に関わったことがありますが、その編集は想像以上に時間のかかるもので、「まだ10年ある」ではなく、「あと10年しかない」との気持ちをもって直ぐにでも企画をスタートさせていただくことが肝要かと考えます。(Dragon)
- ◆どのご講演・ご発表もとても興味深いものばかりで学びの多い二日間でした。事前準備、当日の運営、懇親会のとまりまとめなどありがとうございました。(匿名希望)
- ◆広島で新たな研究の刺激をいただきました。大会運営ご苦労様でした。ありがとうございました。(K-shu)

第40回全国大会（広島大会）を終えて

大会実行委員長 上野 舞斗

前身の日本英語教育史研究会の結成から数えて創設40周年を記念する全国大会を、本学会の「聖地」とも言える広島で迎えることができました。北は北海道、南は沖縄からご参加いただき、参加者数は対面・オンラインを合わせて、2日間延べ100名強にのぼりました。ご参加いただきました皆様に篤くお礼申し上げます。

本大会では記念講演、記念プログラム、12件の研究発表が行われ、40周年に相応しい充実した内容となりました。江利川春雄先生の記念講演では、江利川先生ご自身の研究・実践史を交え、英語教育史研究、および関連領域に関する史資料や年表、辞事典、通史等について、中間的総括が行われるとともに、創設50周年に向けた『英語教育史研究事典』の出版などの多くの「宿題」が提起されました。この「宿題」に応えられるよう、一層研究に励まねばならないと意を強くした次第です。出来成訓先生（本学会初代会長）の遺作となる『日本英学者人名事典』を素材とした記念プログラムも大いに盛り上がり、登壇者（江利川春雄氏、竹中龍範氏、上野勇治氏、森悟氏、熊谷允岐氏、さらにコーディネータとして馬本勉氏）はもちろん、フロアの先生方の本事典に対する熱気に満ちた時間となりました。机上の『日本英学者人名事典』から、議論に参加しようとする出来先

生のお声が聞こえてくる気がしたのは私だけでしょうか。また、12 件の研究発表は、通時的にも共時的にも多様なテーマに基づくもので、英語教育史という分野の懐の広さと奥深さを改めて感じた次第です。講演者、登壇者、発表者の皆様にこの場をお借りして改めてお礼申し上げます。

全国大会実行委員長として至らぬ点ばかりでしたが、実行委員 7 名の先生方、理事・幹事の先生方のご尽力、さらにはご参加くださった皆様のご協力のおかげで、なんとか成功裡に終えることができました。特に、会場校の馬本勉先生、河村和也先生には大会に向けた周到なご準備、細やかな気配りを賜りました。深くお礼申し上げます。

わたくしごとながら、本学会に入会して 10 年になる身として、思いを新たにしたい大会になりました。50 周年に向け、全国大会や研究例会でますます多くの発表が行われることを切に願うとともに、自らもその一員として奮力を続けてまいる所存です。

関係各位への感謝

日本英語教育史学会会長 田邊 祐司

第 40 回全国大会を成功裡に終えることができましたのは会員の皆様のご尽力・協力があつたからに他なりません。以下、会長として感謝の言葉を述べさせていただきます。

まずはご多忙な中、記念講演を引き受けられた前会長の江利川春雄先生には感謝の念に堪えません。先生は英学史・英語教育史の研究を振り返りながら、これまで成し遂げられたこと、さらに未成の課題について見事に総括されました。未成の課題は無論、創立 50 周年に向けてスタートを切ったわれわれへの「宿題」であり、「エール」です。

12 件の研究発表では歴史研究を軸に報告があり、会員各位の問題意識のあり方とともに研究の多様性を感じることができました。記念プログラムは、初代会長の故・出来成訓先生の畢生の名著『日本英学者人名辞典』(江利川春雄・竹中龍範 校閲, 2024, 港の人)をめぐった内容で、出版元の上野勇治社長をはじめ登壇者がそれぞれの思いを語られ、プログラムに深みを与えられましたとのこと(ここは伝聞; 私自身は家人が負傷で緊急搬送・手術となったため、後ろ髪を引かれる思いで帰京)。

広島はかつて「英語教育」と称されていた時代にこのディシプリンを「学」として体系づけるための地固めが行われた「聖地」のひとつです。オンライン参加の方々には申し訳ありませんが、ゆかりの地での 40 周年大会では「やっぱり、対面はいいね!」という会員諸氏の思いを何度も耳にしました。会員同士で独特の「空気」を共有しながら、語り合い、討議し、笑い合えるという in person の交わりはスクリーン上では味わえない空間・時間となったことを確信しました(懇親会も大きな盛り上がりとなりました)。そうした対面エネルギーを浴びた私は反骨のジャーナリストむのたけじ(1915-2016)の次の言葉を思い出していました。

学ぶ営みは一人ではじめて、一人へもどっていく。はじめた自分と、もどっていく自分とのあいだに、たくさんの人が入れれば入るほど、学んだものは高くなり深くなる。(『詞集たいまつ I』1989 評論社)

次年度の全国大会(場所は近日発表)においても会員の息吹をお互いに感じながら、学びが高くなり、深くなる会にしたいと考えております。

末筆ながら、大会の開催校の馬本勉副会長、河村和也事務局長には会場選定から事後処理に至るすべての工程を滞りなく運営していただきました。また、7 名の実行委員の先生方、とくに委員長

の上野舞斗先生にも感謝の言葉しかありません。そして何よりも大会に参加していただいた理事の諸先生方、会員・非会員の先生方にも心よりお礼を申し上げます。50周年へ向けて歩み出した本学会会員のご健勝およびさらなるご発展をお祈りし、お礼の言葉とさせていただきます。

》 事務局より

》 2024年度 会員総会 報告

2024年度の会員総会は、全国大会の開会に先立ち、5月18日(土)12時30分より県立広島大学サテライトキャンパスひろしまで開催されました。理事で事務局長の河村和也(県立広島大学)の進行で始まった総会では、冒頭、第2代会長を務められた伊村元道先生が去る3月19日に逝去された旨が会長の田邊祐司氏(専修大学)より伝えられ、出席者全員で黙祷を捧げました。その後、柘木貴之氏(北海学園大学)を議長に選出し、以下の議事を進行しました。

○ 活動報告・会計報告

活動報告・会計報告の内容は別掲の通りです。総会では、事務局長の河村和也による両報告に続き、平井清子氏(北里大学)より会計監査報告を受け、2023年度の会計報告については承認されました。

○ 報告事項(投稿規程等の改正について)

理事で編集委員長の惟任泰裕氏(大阪成蹊大学)より、理事会の決定に基づき、学会誌『日本英語教育史研究』の投稿規程について現在の審査プロセスとの整合を図ることを目的に一部を改正する旨が報告されました。出席者より改正の趣旨に沿った表現にすべきとの意見が出され、修正のうえ別掲の通り文言を確定しました。

あわせて、学会賞規程について現在の審査プロセスとの整合を図ることを目的に一部を改正する旨が報告されました。

○ 報告事項(著作賞規程の改正について)

会長の田邊祐司氏より、理事会の決定に基づき、著作賞規程について現在の審査プロセスとの整合を図ることを目的に一部を改正する旨が報告されました。

2023年度活動報告 -----

1. 全国大会・研究例会について

1-1. 第39回全国大会を2023年5月20日・21日に神奈川大学みなとみらいキャンパス米田吉盛記念ホールを会場とし、対面とオンラインのハイフレックスで開催した。

記念講演は中島平三氏(東京都立大学名誉教授)にお願いした。研究発表は10件で、大会発表賞は鈴木聡氏(鳥羽商船高等専門学校)に贈られた。

1-2. 5月を除く奇数月に以下の研究例会をいずれもオンラインで開催した。

- ・ 第293回研究例会(2023年7月15日)
- ・ 第294回研究例会(2023年9月16日)
- ・ 第295回研究例会(2023年11月18日)
- ・ 第296回研究例会(2024年1月20日)
- ・ 第297回研究例会(2024年3月16日)

*全国大会・研究例会の詳細は『日本英語教育史研究』第39号を参照されたい。

2. 学会誌について

2023年5月、学会誌『日本英語教育史研究』第38号を刊行し、前年度までの会費を納入済みの会員に送付した。

2023年度会計報告 -----

収入の部		支出の部	
繰越金	1,483,216	会報関係費	40,168
学会費	394,000	事務活動費	57,389
紀要代金	0	大会運営費	174,395
広告代金	0	紀要経費	295,890
大会参加費	23,026	雑費	990
雑収入	0	支出合計	568,832
寄付・補助金	100,000		
収入合計	2,000,242	収支差額	1,431,410

以上相違ありません。

2024年5月15日

事務局会計 河村 和也 印

会計監査 平賀 優子 印

同 平井 清子 印

『日本英語教育史研究』投稿規程の改正 -----

旧	新
2. 投稿論文は日本英語教育史の研究に資する内容のもので、未発表の論文であることが求められる。ただし、国外における英語教育史を対象とした研究であっても、日本の英語教育に影響ないし示唆を与える内容であれば、これを排除しない。また、すでに口頭で発表し、その旨を明記している場合は、他誌等に投稿中でないことを条件に、審査の対象となる。	2. 投稿論文は日本英語教育史の研究に資する内容で、書籍もしくは論文、研究ノートとして未発表のものであることが求められる。ただし、国外における英語教育史を対象とした研究であっても、日本の英語教育に影響ないし示唆を与える内容であれば、これを排除しない。
6. 投稿論文の提出は、正本・副本各1部とし、正本には著者名を明記し、副本には著者名を伏せるものとする。提出は電子メールへのファイル添付によるものとし、メール本文中に著者名および連絡先メールアドレスを明記することが求められる。電子メールの送受信が困難な場合は、編集委員会に相談すること。	6. 投稿論文の提出は、正本・副本各1部とし、正本には著者名を明記し、副本には著者名を伏せるものとする。本文についても、著者が分からないよう記述（科研採択番号や謝辞などはマスキング）すること。提出は電子メールへのファイル添付によるものとし、メール本文中に著者名および連絡先メールアドレス

	を明記することが求められる。電子メールの送受信が困難な場合は、編集委員会に相談すること。
8. 投稿論文は、論文審査委員会の審査を経て、その合否、および、合格の場合は、論文、研究ノート、調査報告、その他との種別が決定され、著者に通知される。	8. 投稿論文は、論文審査委員会の審査を経て、その合否、および、合格の場合は、論文、研究ノート、調査報告、その他との種別が決定され、著者に通知される。なお、査読は匿名で行われるため、原則として編集委員会は査読コメントの内容に対する質問等には応じない。

日本英語教育史学会賞規程の改正 -----

旧	新
<p>(選考)</p> <p>第 4 条 学会賞の授与候補者の選考は、正副会長及び論文審査委員会が行う。被審査論文は、次の観点から審査される。</p> <p>(a) 論述の展開</p> <p>(b) 研究の方法・技術</p> <p>(c) 独創性</p> <p>(d) 日本英語教育史研究への寄与</p> <p>なお、該当論文がない場合は、その年度の授与は行わない。</p>	<p>(選考)</p> <p>第 4 条 学会賞の授与候補者の選考は、正副会長及び論文審査委員長が行う。被審査論文は、次の観点から審査される。</p> <p>(a) 論述の展開</p> <p>(b) 研究の方法・技術</p> <p>(c) 独創性</p> <p>(d) 日本英語教育史研究への寄与</p> <p>なお、該当論文がない場合は、その年度の授与は行わない。</p>

日本英語教育史学会 著作賞規程の改正 -----

旧	新
<p>(選考)</p> <p>第 4 条 著作賞の選考は、当該書籍の日本英語教育史研究への寄与の観点から、著作賞選考委員会が行う。著作賞選考委員会は、正副会長及び論文審査委員長によって構成される。選考に際し、顧問、名誉会長に助言を求める場合がある。</p> <p>なお、該当書籍がない場合は、その年度の授与は行わない。</p>	<p>(選考)</p> <p>第 4 条 著作賞の選考は、当該書籍の日本英語教育史研究への寄与の観点から、著作賞選考委員会が行う。著作賞選考委員会は、正副会長及び論文審査委員長によって構成される。選考に際し、顧問、名誉会長に助言を求める場合がある。選考委員会の協議の結果、著作に応じた名称によって賞を授与する場合がある (例：著作特別賞)。</p> <p>なお、該当書籍がない場合は、その年度の授与は行わない。</p>

)) 2024 年度 日本英語教育史学会賞について

2024 年度の日本英語教育史学会賞については、受賞に該当する方はいらっしゃいませんでした。

)) 2024 年度 日本英語教育史学会著作賞について

全国大会初日の授賞式において、2024 年度の日本英語教育史学会著作奨励賞が柎木貴之氏（北海学園大学）に贈られました。著作の詳細と受賞理由は別掲の通りです

著作者名： 柎木 貴之

書 名： 『国語教育と英語教育をつなぐ：「連携」の歴史、方法、実践』

出版社名： 東京大学出版会

発行日： 2023 年 3 月 22 日

授賞理由：

本書は明治から現代に至る国語教育と英語教育との「連携」の歴史、目的・方法、実践事例を包括した画期的な研究である。「連携」の歴史に関する研究は短いものであることが惜しまれるが、英語教育史研究における未踏の領域であり、学術的価値が高い。著者は豊富な史資料に基づき、4 期に及ぶ連携史の特徴を実証的に解明している。教育の今日的要請に挑む目的意識、歴史から実践に及ぶダイナミックな展開、精緻な考察と豊かな知見、論理的で明快な記述など、本書は優れた研究書であり、著者の卓越した力量が発揮されている。今後のさらなる研究の発展と著者の活躍を期待して、著作奨励賞を授与する。

)) 日本英語教育史学会大会発表賞について

第 40 回全国大会（2024 年度）における研究発表を対象とする大会発表賞は、水島孝司氏（南九州大学）に贈られました。

《発表題目》 大学英語教育に対する日経連意見書（1955）に関する一考察 その 2

)) 学会誌『日本英語教育史研究』第 39 号の送付について

新しい学会誌を 5 月 31 日に発送いたしました。会費納入をお願いする文書（「紀要の送付と年会費の納入について」）を同封いたしましたところ、すでに多くの方にご対応いただいております。この場をお借りして、ご協力に感謝申し上げます。

発送日までに今年度分をお納めくださったみなさまには、納入日を記した文書（「会費紀要の送付について」）を同封いたしましたので、どうぞご確認ください。

1 年もしくは 2 年分の会費が未納の方には、学会誌はお送りせず、この会報の発行時期に合わせて「会員継続のご案内」をお送りいたします。ご確認のうえ、よろしくご対応くださいますようお願い申し上げます。

会費納入に期限は設けておりませんが、事務作業の都合上、7 月末をめどとしていただければ幸いに存じます。

)) 年会費の納入について

年会費は以下の通りです。今一度ご確認くださいませようお願いいたします。なお、学生会員は

初年度の会費が免除されます。

【年会費】 一般：5,000 円 / 学生：3,000 円 (大学院生を含む)

年会費は以下の口座にご送金ください。口座名義は「日本英語教育史学会」です。恐れ入りますが、手数料はご負担くださいますようお願いいたします。

- (1) ① 郵便局で払込取扱票をご利用の場合
- ② ゆうちょ銀行の総合口座 (旧ぱるる) よりご送金の場合
→ ゆうちょ銀行 [振替口座] 00150-3-132873
- (2) ゆうちょ銀行を除く金融機関の口座よりご送金の場合
→ ゆうちょ銀行 〇一九 (ゼロイチキュー) 店 [当座口座] 0132873

上に掲げた2つの口座は同一のものです。ゆうちょ銀行の「振替口座」は、ゆうちょ銀行以外の金融機関から送金する場合には「当座口座」の扱いとなり、支店名や口座番号が他の金融機関の形式に合わせたものとなります。

近年、払込取扱票によらずご送金くださる方が増えておりますので、これを同封するのを取り止めております。払込取扱票をご利用の場合、お手数ですが郵便局の窓口で「0」から始まる口座への送金とお伝えのうえお受け取りください。

>> 会員動静

2024年5月31日現在の会員数は101名となっており、入退会の内訳は以下の通りです。

- ・入会者：5名
- ・退会者：11名
(ご逝去によるもの=1名、お申し出によるもの=4名、連絡不能によるもの=6名)

本会設立以来の会員で第3代会長を務められた小篠敏明先生より退会のお申し出がありました。小篠会長の時代にご就任いただいた山内啓子先生、広島の中中正道先生、山梨の古家貴雄先生も年度末をもって退会されました。

なお、本学会評議員をお務めいただいていた島岡丘先生は別掲の通り4月初旬に還浄されました。

(文責：事務局)

『日本英語教育史研究』第40号 投稿論文の募集

2025年5月に刊行予定の研究紀要『日本英語教育史研究』第40号への投稿論文を募集します。投稿締切は9月30日(月) 23:59 JSTです。投稿規程・標準書式に沿ってご投稿ください。

投稿先・問合せ先 (紀要編集委員会) kiyo@hiset.jp

>> 新入会員

- ◆ 山崎 千春 (やまざき ちはる) 東京都 英語教室 Hello Kids

訃報

本学会第 2 代会長の伊村元道先生におかれましては、去る 3 月 19 日に還浄されました。

先生は本学会の前身である日本英語教育史研究会設立時の発起人のおひとりで、長きにわたり会をお支えくださるとともにその発展をお見守りくださいました。特に会長在任中は、学界の潮流に適應すべく会の改革に取り組み、多大な功績を残されました。

ここにそのご遺徳を偲び、心よりお悔やみ申し上げますとともに謹んでお知らせ申し上げます。なお、伊村先生の業績の詳細及び追悼記事は会報 322 に掲載予定です。

伊村元道先生ご略歴

1935 年生まれ。静岡県藤枝市出身。東京教育大学英文科卒。東京教育大学附属中学校、玉川大学、拓殖大学大学院等で教鞭を執る。学会活動に関しては、本学会の他、日本英学史学会、財団法人語学教育研究所に所属し、語学教育研究所では所長を務めた。

英語教育史関係主要著作

- 『ある英文教室の 100 年』 (共著, 大修館書店, 1978)
 『昭和 50 年の英語教育』 (共著, 大修館書店, 1980)
 『英語教育の歩み』 (共著, 中教出版, 1980)
 「日本の英語受容・教育史」 『英語の常識百科』 (共著, 研究社出版, 1988)
 「昭和時代の英語教育」 『ECOLA 英語科教育実践講座第 17 巻』 (ニチブン, 1992)
 『財団法人語学教育研究所 七十周年記念誌』 (語学教育研究所, 1994)
 『パーマーと日本の英語教育』 (大修館書店, 1997)
The Selected Writings of Harold E. Palmer (共編, 本の友社, 1995)

訃報

日本英語教育史学会の評議員を務められた島岡丘先生におかれましては、去る 4 月初めに還浄されました。心よりお悔やみ申し上げますとともに謹んでお知らせ申し上げます。なお、島岡先生の追悼記事も会報 322 に掲載予定です。

島岡丘先生ご略歴

1932 年生まれ。奈良県出身。東京教育大学英語英文科卒。旭川北高等学校、東京教育大学、筑波大学等で教鞭を執る。学会活動に関しては、本学会評議員の他、IRICE 英語教育学会の会長や、財団法人英語教育協議会 (ELEC) の理事、日本英語音声学会の顧問等を務めた。

)) この先の研究例会・全国大会

- | | | |
|---------------|----------------------|---------|
| ◆ 第 298 回研究例会 | 2024 年 7 月 20 日 (土) | オンライン開催 |
| ◆ 第 299 回研究例会 | 2024 年 9 月 21 日 (土) | オンライン開催 |
| ◆ 第 300 回研究例会 | 2024 年 11 月 16 日 (土) | 検討中 |
| ◆ 第 301 回研究例会 | 2025 年 1 月 11 日 (土) | 検討中 |
| ◆ 第 302 回研究例会 | 2025 年 3 月 15 日 (土) | 検討中 |

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (11 月発表希望であれば 8 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 298 回 研究例会

日 時： 2024 年 7 月 20 日 (土) 14:00~17:00
オンライン開催

研究発表

大正時代の英単語集の研究：明治と昭和をつなぐ教材の変遷

熊谷 允岐 氏 (茨城大学)

【発表者から】本発表では、大正時代の英単語集に着目し、それらの特徴を明らかにすると共に、それらが明治および昭和初期の単語集とどのような繋がりがあるかを考察することを目的とする。昭和初期刊行の著名な単語集には、いわゆる小野圭と赤尾のものが存在する。だが、それ以前の、特に大正時代の単語集については、あまり研究対象とされてこなかった。本発表者ではこれまでの単語集研究 (江戸~明治) にも言及しながら、当時の単語集を俯瞰する。

シリーズ：私の愛した教材

江川泰一郎ほか『A New Guide to English Grammar』(東京書籍, 1980) を中心とする高等学校英文法教材

発表者：馬本 勉 氏 (県立広島大学)

指定討論者：河村 和也 氏 (県立広島大学)

【発表者から】高校時代の「グラマー」では、表題の教科書、参考書『英文法の活用』、問題集『英文法問題の考え方』と、全て江川泰一郎氏による教材で学んだ。問題集は書き換え問題に多くのページが割かれ、おかげで当時よく悩んだ比較級や話法などの文の理解が深まった。『英文法解説』に出会うのは大学生になってからだが、家庭教師や塾講師、教員となってからも『解説』には助けってもらってばかりだ。感謝を込めて、これらの魅力を語りたい。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

EDITOR'S BOX 昨年の夏は集中豪雨の被害に苦しんだ秋田ですが、今年は 6 月中旬になってもほとんど雨が降りません。冬に雪があまり降らなかったこともあり、水不足も心配される状況になってきました。／伊村先生や島岡先生をはじめ、大学院生の頃からお世話になった先生方の訃報が続いていることに、何とも言えない気持ちになっています。今後の生き方についていろいろ考えるようになりました。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 wakaari@nifty.com)